
煙草

ミルク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

煙草

【Nコード】

N7244Y

【作者名】

ミルク

【あらすじ】

煙草の火は心と似ている。

誰かがいなければ、その火はつくことはないし消えることもない。

そのことを煙草に気付かされる恋愛物語。

ネオンが輝くビル街。煙草の火がゆらゆらと漂っていた。

火は橙色に変わっては赤くなり、ネオンに劣らず輝いていた。

煙りは立ち上ると、街に溶け込むように消え、無かった存在へと還る。

「やっぱりヤメだ。今日は帰る」

男の唇に貼り付いた煙草が、口の動きとともに上下に揺れる。その振動で灰は地面へとぱらぱら落ちていき、細かい粒子のような灰は服へと付着する。

「なんでよー。『ホテル行こう』って誘ったのは黒鉄の方じゃん！ すっかりその気になってたのに！」

黒鉄という男の腕を両手で強く掴み、駄々をこねる子供のように、黒鉄の体を揺さぶる。

「あー悪い。愛がなんだかよー、わかんねえんだわ。ごめんな」

腕にしがみつく女の頭を、手のひらで押し退けながら笑顔で謝罪をしているにも関わらず、笑顔を见せる行為は矛盾している。それでも女は、責めることなく頬つぺたを膨らませている。

「……次、いつ会える？」

「愛がなんなのか、それがわかったらメールする」

女の頭を撫で、背を向ける。その背中は言葉を投げ掛けても振り向かないと物語っていた。それを察しているのか、女はその背中をただ見つめていた。

煙草の残り香が、女の嗅覚を刺激する。

「……臭いよお」

刺激は涙へと変えていった。そして、黒鉄の背中は風景に溶け込んでいった。

「愛ってなんだろうなー。……わかんねえ、煙草を吸ってる理由も

わかんねえや」

煙草を指で摘まんで、地面へと落とす。それを爪先で踏みにじり火を消す。

橙色に輝いていた火種は、足を上げると、あっという間に黒くなり、熱を帯びていなかった。それを見つめる黒鉄は言葉を紡いだ。「熱い想いは踏みにじられると消える……。あいつ、離れてくんな」

その刹那、携帯の着信音がジーンズのポケットの中で鳴り響く。携帯を取りだし開くと、一件のメールが届いていた。メールを開くと、画面に一文が表示された。

『いつ、愛が何なのか分かりますか？』

「……………」

黒鉄の表情に、安堵が入り交じった微笑みが溢れていた。

「メール。来ないかと思ったのになあ……………」

ネオンの輝くビル街に、一人の女が、両手で携帯を持ちながら、顔を懸けているように熱い視線を画面に向けていた。

着信音が両手の中で鳴り響くと、願いが叶ったのか、悦びの表情をつくる。

女の携帯には一文が表示されていた。

『今分かった。』

黒鉄は胸ポケットから煙草と百円ライターを取り出した。煙草をくわえ、風を避けるため、手のひらでライターの火を覆い隠し、煙草に火をつける。

深く息を吸い、夜空に白い煙を撒き散らす。

そしてまた、ネオンに劣らず煙草は輝きだす。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7244y/>

煙草

2011年11月21日13時51分発行